114
A2685

戎器火藥類取締法

第一條　本法ニ於テ戎器ト稱スルハ銃砲刀劒及槍戟ノ類ヲ謂ヒ火藥類ト稱スルハ火藥雷管導火線其ノ他爆發質物品ヲ謂フ

第二條　軍用銃砲及火藥類ハ官廳ノ委任ヲ受ケタル者ニアラサレハ製造又ハ輸入スルコトヲ得ス但シ火藥商及官廳ノ特許ヲ受ケタル者ノ火藥類ノ輸入ハ此ノ限ニ在ラス

第三條　新奇發明ニ係ル銃砲又ハ火藥類ヲ試驗ノ為メ製造セントスル者ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣ノ許可ヲ受クヘシ

陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ試驗製造ノ成績不良

大正十一年四月
大蔵省
1885

ナリ十認ムルトキ又ハ廳府縣長官ノ定メタル危害
豫防ノ方法ヲ遵守セサルモノト認ムルトキハ何時ニ
テモ試驗製造ノ許可ヲ取消スコトヲ得
第四條　軍用銃砲ノ種類ハ陸軍大臣又ハ海軍大臣
之ヲ定ム
第五條　戎器製造ノ營業ヲ爲サントスル者ハ廳府
縣長官ノ許可ヲ受クヘシ
戎器ノ修繕及研磨ヲ營業トスル者ハ戎器製
造營業者ト看做ス
第六條　戎器商及火藥商ノ營業ヲ爲サントスル者
ハ廳府縣長官ノ許可ヲ受クヘシ
第七條　火藥商及銃砲販賣ヲ營業トスル戎器
商ノ廳府縣ニ於ケル定員ハ内務大臣之ヲ定ム

第八條　第五條及第六條ノ營業許可ヲ得タル後六
箇月間開業セス又ハ開業後一箇年間休業
シタルトキハ廳府縣長官ハ其ノ許可ヲ取消スコト
ヲ得
第九條　戎器製造營業者戎器商又ハ火藥商法
律命令ニ違背シ又ハ戎器火藥類ヲ危險ノ用
ニ供スルノ虞アリト認ムルトキハ廳府縣長官ハ
營業ノ許可ヲ取消シ又ハ營業ヲ停止スルコト
ヲ得
第十條　戎器製造營業者ハ其ノ製造改造ニ係ル銃
砲ヲ銃砲販賣營業者以外ノ者ニ賣渡シ讓
渡シ交換又ハ贈與ヲ爲スコトヲ得ス
但官廳又ハ官廳ノ特許ヲ得タル者ニ對シテハ此限

ニ在ラス

第十二條 戎器火藥類ハ行商シ又ハ露店市場其他屋外ニ於テ授受スルコトヲ得ス

第十三條 警察官憲兵ハ必要ト認ムルトキハ何人ノ所有ヲ問ハス火藥類ノ檢査ヲ爲スコトヲ得

第十三條 内務大臣ハ公共ノ安寧ヲ保持スルニ必要ト認ムルトキハ期間及地域ヲ限リ戎器火藥類ノ授受運搬及携帶ヲ禁シ又ハ制限スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ警察官憲兵ハ必要ト認ムルトキハ戎器ノ檢査ヲ爲シ又ハ戎器火藥類ヲ領置スルコトヲ得

第十四條 第二條ニ違背シタル者ハ刑法第百五十七條及第百六十一條ニ依リ處斷ス

第十五條 第十三條第一項ノ命令ニ違背シタル者ハ八月以上一年以下重禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ尚其ノ物件ヲ没收ス

第十六條 第五條又ハ第六條ノ許可ヲ受ケスシテ營業ヲ爲シタル者及第九條ノ停止命令ニ違背シテ營業シタル者ハ五円以上五十円以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 第十條及第十五條ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 烟火燐寸爆發質玩弄品ノ製造其ノ他火藥類ヲ要スル工業ニ關シ必要ナル規則ハ別ニ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 本法施行ノ爲必要ナル規程ハ命令ヲ以

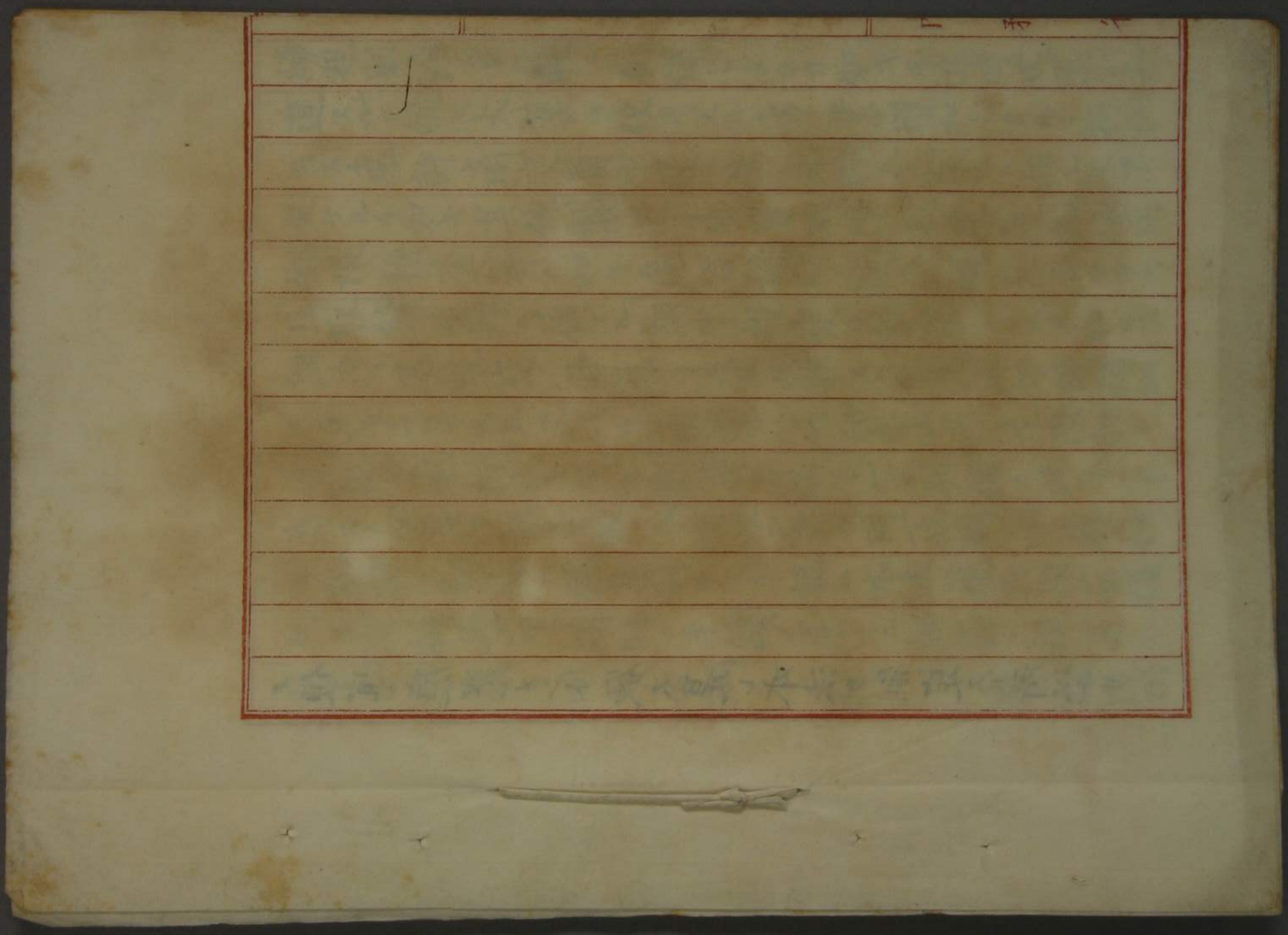
テ之ヲ定ム

第三十條　明治五年第三十八號布告銃砲取締規則及明治十七年第三十一號布告火藥取締規則ハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十一條　布告煙硝類物取締罰則ハ本法ノ爲其ノ施行ヲ妨ケサルヽコトナシ

第三十二條　本法ハ陸海軍其ノ他官廳ニ屬シ及官職ニ要スル戎器火藥類ニ適用セス

理由

銃砲取締規則ハ明治五年ノ制定ニ係リ社會進歩シ銃砲ノ需用及其種類著シク增加シタル今日ニ在テハ取締上ノ須要ニ應シ難キモノアリ例之免許商ノ定員寡少ニシテ實際ノ需用ニ應シ難キモノアルカ如キ軍用銃非軍用銃ノ區分ノ如キモ現行ノ規定ハ事實ニ適應シ難キモノアリ其他製造、輸入、授受、運搬、營業免許使用、制限ニ關スル規定ノ如キ其不備欠点一ニシテ足ラス且カ劍、槍戟ノ如キモ性質上危險ノ器具タルニ拘ハラス從來之ニ關スル規定ヲ欠ケルハ公安保持ノ上ニ於テ全キヲ得タルモノト謂フヘカラス又火藥取締規則ハ明治十七年ノ制定ニシテ銃砲取

締規則ニ比スレハ較ニ完備シタルカ如キモ近時世運ノ上
進スルニ從ヒ火藥ヲ使用スルノ事業增加シタルニ拘ハ
ラス免許商定員少ナキニ失シ又輸入ニ關スル規定ヲ
欠ケルカ如キ其他製造、賣買制限、授受運搬、使用
制限、檢査等ノ如キ危害豫防ニ關スル規定全カラス
且取締手續ニ屬スル細小ノ規定ヲ網羅シタルカ如キ
細カニ其規定ノ條章ヲ查覈スルニ是亦不備煩細
ノ点少ナカラス且夫戎器火藥ハ性質上共ニ危險物ニ
シテ警察行政上同一ノ取締ニ屬シ之ヲ別個ノ法令ト
為スノ必要ヲ認メス故ニ今回此二者ヲ同一法規ノ下ニ纏括
シ取締ヲ加フルノ便且利ナルヲ認ム本法ハ現行法ノ不備
欠点ヲ補正スルト同時ニ手續ニ屬スル細節ノ規定ハ
之ヲ命令ニ讓リ唯其大綱ノミヲ揚ケ以テ實際運用
ノ便宜ニ應セシメント欲スル是レ本法ヲ制定スル所以ナリ